

フェイク緑化の見分け方 ～大阪マルビル壁面緑化の検証～

大阪府立大学生命環境科学部教授
(専門分野；都市気象、都市緑化技術、建築物緑化)

前回紹介した大阪マルビルの壁面緑化は、環境緑化新聞紙上でも様々な批評が行われており、その中に、あれはほとんど偽物の植物が使われているという指摘があった。実物を見た感じでは、一部にフェイク（偽物）が使われているようにも思えるが、全体としては本物の方が圧倒的に多いと思っていた。しかし、このような指摘がなされている以上、それを客観的に検証してみる必要があるということ、四万十市で日本国史上初の最高気温41.0℃を記録した翌日、現地を赴いて検証作業を行った。

検証に用いるのは超小型のサーモグラフィである。昔のフェイクは一目で造花と分かる稚拙なものであったが、最新のフェイクは遠目には本物と区別が付かないほど精巧なものも多い。近くに寄って見ても真贋が分からず、触ってみて初めて偽物と確認できるような物まである。こういったフェイクは、見た目は本物そっくりであるが、内部に水分が無く蒸散を行わないという決定的な違いがあり、直接触れてみると葉の水分感を感じないので、すぐに偽物と判断できるのである。これを直接手で触れずに検証するのがサーモグラフィである。低温時には区別できない事もあるが、高温強日射時には、本物とフェイクの差は歴然となる。プラスチックやビニールで作られたフェイクは周囲の気温よりも高温化し、蒸散を行っている本物は格段に低い温度を示すのである。

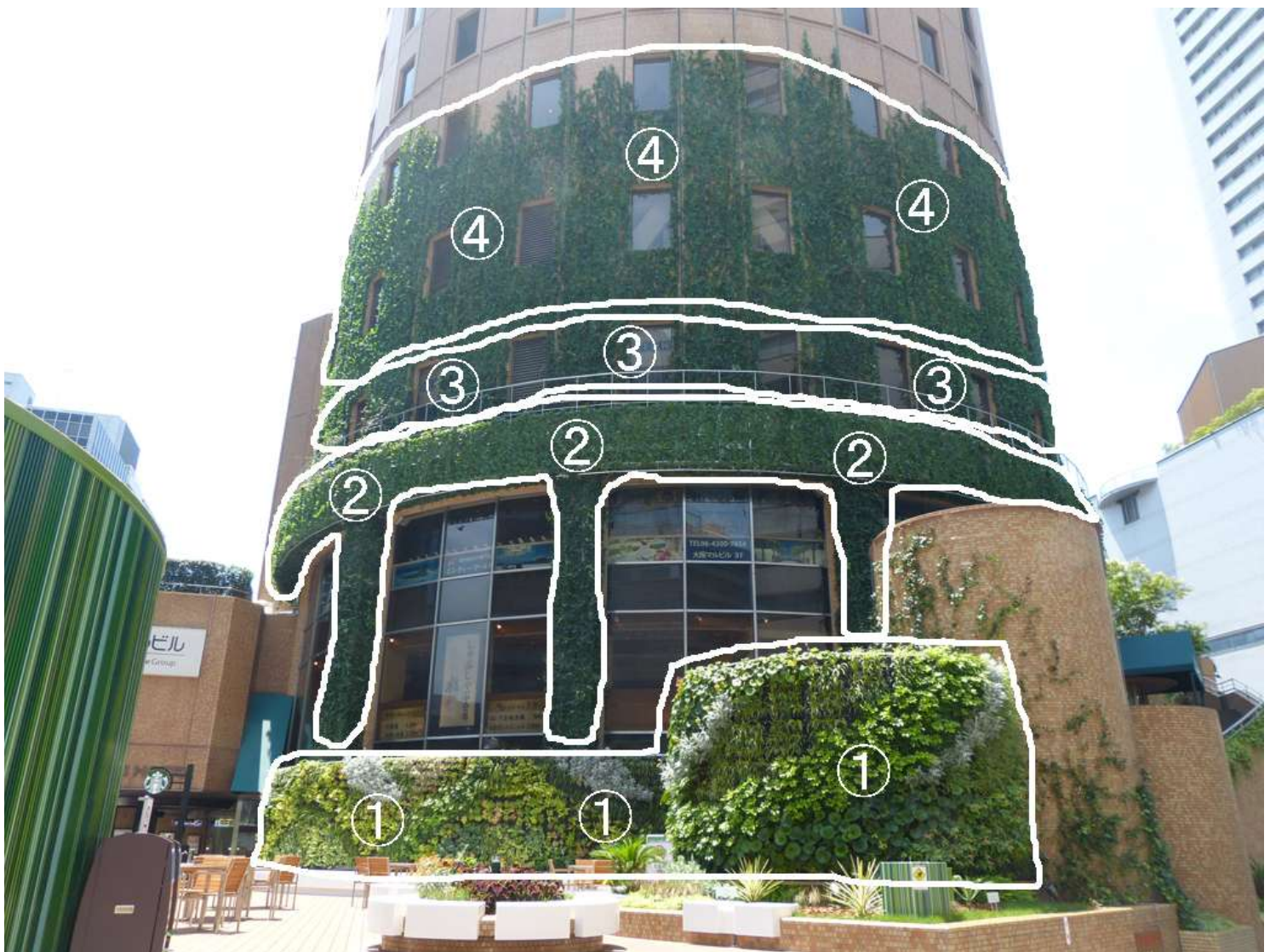
検証を行った日は高温快晴で、壁面の一部には直射日光も当たっていて、絶好の検証日和である。壁面にサーモグラフィを向けて、ものの30秒で全容は判明した。あとは細部検証ということで、近くから遠くから、様々な角度で温度分布を見ていった。

結論はこうである。地上階付近、写真の①の部分は全て本物である。灌水管も行き届いており、ここ数年来で最悪の高温条件下であっても生き生きと生育を続けており、温度も極めて低い。②の部分は本物、フェイクが混じったハイブリッド緑化（フェイクと本物を混ぜて使う緑化方法。勝手に作った造語だが、本欄ではこの言葉を使わせてもらう。）である。しかしながら、F（フェイク）／O（オリジナル：本物）比は9：1程度であり、現状、ほとんどがフェイクである。上部の円環部分は本物だと思っていたので、これは少々ショックである。③の部分もハイブリッド緑化だが、F／O比は1：9程度で、ほぼ本物と言っていい。④は、今回用いたサーモグラフィで見た限りでは、100%フェイクである。

個人的にはハイブリッド緑化は別に悪い事ではないと思っている。完成まで

の期間、見苦しくない程度に彩る補助材という考えであれば、大いに使っているのではないだろうか。しかし、④はちょっとやり過ぎで、将来の姿を示す下絵だとしても、インチキ感が強すぎる。日の当たった部分は無緑化の壁面よりも高温化しており、日中のヒートアイランド軽減という視点からは、むしろマイナスである。

ここで心配なのは、将来、こういったハイブリッド緑化が増えてきた場合、緑化義務面積に偽物が加算されてしまう事である。基盤造成型壁面緑化の面積算定割合を大きくしようという機運が高まっているが、精巧に擬態したフェイクには十分に気を付けなければならないだろう。



写真：大阪マルビル壁面緑化のF/O分析結果